

## 翻刻『兵庫築島伝』その三

森田雅也  
高瀬万人

本稿は、関西学院大学図書館蔵『兵庫築島伝』巻三の翻刻である。書誌及び凡例は先の二号（『日本文藝研究』第五十七卷二号、同三号）と同様であるが、利用の便を考慮し、凡例のみ再掲する。

### 【凡例】

- (1) 漢字の旧字体は、適宜現行の字体に改めた。
- (2) 漢文の返り点、白丸「」は原文に従い、連字符については省略した。
- (3) 翻刻本文中の片仮名、平仮名は、原文の表記に従った。
- (4) 合字はすべて現在通行の文字に改めた。
- (5) 丁の変わり目を、丁数をアラビア数字にて、表裏は片仮名語頭の一字にて（1オ）ように示した。
- (6) 挿絵は、底本を撮影し、挿入した。
- (7) 明らかに誤字・誤刻と思われる箇所については、下に（ママ）と付記した。
- (8) 漢字に濁点が付されている場合には、振り仮名の形で（ ）と示した。
- (9) 仮名として読める漢字も原文のままとし、振り仮名の形で（ ）で括って仮名を振った。但し、振り仮名において用いられている場合は、その限り

ではない。

(10) 振り仮名や仮名遣い、反復記号(「、」「く」など)、仮名の清濁は、底本のままとした。

(11) 序文にある印字も現行の字体に改め、翻刻した。

【翻刻】

兵庫築島伝卷三

目録

黄鶯堂、如来縁由并観実法師語ニ往事一  
阿野ノ入道葬ニ妻子ヲ并岡僧出レ山詣熊野ニ  
国春那智逢亡妻ニ并国春囚築島人柱ニ  
重友投ニ宿野瀬館ニ并語ニ国春人柱窮災ヲ  
明月姫忍テ到ニ兵庫ニ并蔵人訴レ官請ニ肆赦ヲ

已上

(目オ)

空白

兵庫築島伝卷三

吞一叟积円信著

黄鶯堂、如来来由并観実法師語ニ往事一

○蜀帝羈旅ニ崩ジテ。魂子規ト化シ。啼ニ不如婦ノ声  
アリ。齐后忿死シテ形蟬ト変ヂ喉ニ齐女ト響アリ。夫  
婦ノ一念鴛鴦トナリシモアリ。親子ノ執情千鳥ト変ゼ  
シモアリ。喜怒哀情異ナリトイヘドモ。和漢其例寡カ  
ラス。憐ヘシ横笛ガ執念夫ヲ慕フノ切ナルニヨリテ。身  
ハ報春ノ黄鶯トナリ。迢遥タル高野山ニ尋子来リテ。  
滝口カ手中ニ飛テ止リシハ哀レトイフモ愚ナリ。滝口入  
道ハ涙ナカラ彼鶯ニ打向ヒ。夢中ノ娑婆。幻ノ浮世双  
棲テ一身ヲ共ニストモ。芳槿一朝ノ契ナリ。百年同謝

(目オ)

西山日。千秋万古北邱塵トキヘヌル人間ノ身ノ上。  
会者定離ノ習ナレハ。ヨシナキ事ト悟ルヘシ縦ヒ状ヲ替

スシテ。夫婦トナリテ暮トテモ。愛別離苦ノ掙ナレハ。  
ナドカ長ク添遂シヤ。唯永キ未来ニテ。一蓮託生ノ証ヲ  
開キ。尽セヌ契ヲ期スベキノ。我命ノアラン限リハ。汝  
ガ菩提ヲ訪フヘシ。早ク執着ノ雲ヲ晴シ。真如ノ月ノ  
都ニ到リ。半座ヲ虚テ待テ居ヨト。鶯ニ向ヒテ念仏シ。  
惨然トシテ立上リ。仏前ニ供ヘタル。華水ヲ取テ飲シム  
レハ。依々トシテ彼鶯サモ嬉シキ状況ニテ。肩ニ飛ツ  
キ。膝ニ止リ姁々タル声ニテ嘽嘽トシテ嘯リシガ。終ニ  
入道ガ膝ニテ死シタリケル。滝口入道浄阿ハ。今サラ不  
便イヤマシテ。死骸ヲ抱涙ナカラ仏ノ前ニサシ置テ。読  
經念誦アサカラス。得脱ノ為

(1ウ)

ニトテ阿弥陀如来ノ木像ヲ造リケル。三松入道国春コノ  
アリサマヲ親ク見テ。共ニ愁涙ヲ催シケルカコレモ同ク  
菩提ノ為ト共ニ刻テ兩人カ。作り立タル尊像ノ御身ノ中  
へ鶯ノ死シタル骸ヲ納メ入レ。開眼供養ヲ遂ラレケル。  
今ニ残レル鶯堂ノ阿弥陀如来コレナリ。斯テ兩人ノ僧

ハ慇懃ニ読經シ常ニコノ如来ヲ念シ。横笛ガ菩提ヲ訪  
ヒケル。或夜ノ夢ニ彼鶯慨然トシテ来リ。滝口入道ニ向  
ヒ告ケルハ。追善供養ノ功力ニテ。今ハ執念晴ワタリ。  
仏身ヲ得奉ルコノ御礼ノ為ニ来リシナリ。我浄土ニ参リ  
花ノ台ヲワカチテ待ヘキ間。早念仏シテ浄土ニ往生アル  
ヘシト。告終リテ夢サメケリ。滝口入道大ニ喜ヒマスノ  
ソレヨリ信心シ庭ノ梅樹ヲ切テ厨筈ヲ造リ。件ノ如  
来ヲ安

(2オ)

置シ奉リ。国春法師ト共ニ念仏怠ナシ然ニ其トナリ  
ニ。草庵ヲ結ベル法師アリ。コレモ浮世ヲ厭ヒ捨シ桑門  
ト見ヘテ。年ノ頃四十バカリ法名ハ觀実トテ。専念ニ  
念仏シテアリケルガ。アマリニ寂寞ニ各々集テ四方八  
方ノ物語シ。往事ヲ語り合ケルニ。国春入道浄蓮申ケ  
ルハ我カク形ハ染レトモ心ハ染マヌ今同心。先達ニ妻  
ノ面影。行方シレヌ娘ノ姿。心ニカ、リテ夢幻ニミヘテ  
心モ静ラスト。語ラレケレハ。彼觀実毛涙ヲ流シ。我ハ

古郷ハ越後ノ国。柏原近キスヨシト云所ノ郷士阿野左  
 エ門経季ト申ス者ナリ。何ナル宿世ノ因縁ニヤ。妻子  
 ヲフリステ、剃髮シテ古郷ヲ離レ諸国ヲ修行スルコト三  
 年ナリ。或時ノ事ナリシガ。余リモ古郷ノナツカシサ  
 ニ。都ヨリ近江

(2ウ)

路ニカ、リ。志賀ノ里ニ行テ里人ニ宿ヲ求ムレドモ。宿  
 ヲカス人ナシ。山本ヲ見レハ一群茂ル森アリ小屋ノ見ヘ  
 タリケレハ。彼処ニ至リテ宿セント至リシカハ。蕭々タ  
 ル地藏堂アリ。爰ニ一夜ヲ明サントテ入テコ、ニ休ラヒ  
 ケルニ颯々トシテ風フキ来リ。響ニツレテ近キ木ノ下ニ  
 小兒ノ啼泣スル声アリ。天籟カト耳ヲ聳レバ。物哀レニ  
 身節ニコトユル哭声ナリ。不審ク思ヒテ其声ヲシルベト  
 シ。尋子至リミレハ漸々半町ニタラズ。小。児ガ女ノ伏  
 タルヲ動カシテ。泣アリサマ。目モアテラレヌ次第ナ  
 リ。不便ニ思ヒテ月影ニ。女ノ姿ヲスカシ見レハ。身ニ  
 着セル衣服モ。垢ニヨゴレヌレドモ。ウヘニハ綾子ノ刺

繡アル衣ヲ着シ。下ニハ縷文絹ノ褻衣キタリ。顔容ヲ改  
 メミルニ。寝タルニハ非ズ

(3オ)

シテ死タル尸ナリ。憐ニ思ヒテ猶モヨク々々察見スレ  
 ハ。三年前家ニ残シ置ツル妻ナリ。憔悴ストイヘド  
 モ。見覚ヘアル顔形マガヒモナキ女房ナリ。偕ハ我行  
 衛ヲバ尋子サガシテ。方々トサマヨヒ歩キテ途中ニテ。  
 病ニ犯レ宿ル方ナク。此木ノ下ニ休ヒテ。医療ノ事モナ  
 ク。介抱スル者モナク。コノ子ヲ残テ相果シカ。此子コ  
 ソハ残シ捨ツル。藤若ナルカト小兒ノ顔ヲ打チ守リ。見  
 レハ見ル程我顔ニヨクモ似タリシ恩愛ノ。繫累ニヒカ  
 ル、血ノ涙。気モ心モキヘ入ルバカリ。思ヘハ々々コノ  
 子ハヤウ々一歳ニテ別レシ悴ナリシカト見ルニ目モク  
 レ抱ヨセ。ヤレ我コソハ父ナルゾト。イヘトモ中々耳ニ  
 モイレズ。甲斐ナキ母ノ死散ニトリツキ。喚叫ブ声モカ  
 レ。断腸泣血ノ愁歎ヲ見ル悲シ

(3ウ)

サハ。イカバカリ。叫サケブ子ヨリモミル親ノ。心ノ中ハ四苦八苦。慟ウレレ哭スルバカリナリ。

阿野 経季葬ル妻子ヲ并ニ両僧出レ山詣ス熊野ニ

○漫マシク々タル秋ノ夜モ。既スニ東二明サスコロ。セメテ死骸ヲ葬ムラント。襖フコキツ被レノ中ヨリ剃刀ヲ取出シ。谷川ノ水ヲ掬スクヒ。髪ヲ洗アワセテ剃シントス彼小児ハコレヲミルヨリ。剃セジト取ツキテ泣ナクリヤヤフ々抱イダキノケ。ソラントカ、レハ又サガリ付。涙ト共ニ言聞セ。得心トシサセテモ小児ノ事。母ノ死骸ニ攀スガリツキ。足摺アシゾリシテナキ悲ムヲ。ヤフ々二宥ナダメツ、髪ソリステ、ソレヨリモ。共木ノ下ヲ堀穿ホリウカツ。頃頃ハ九月ノ末旬。萩ハギノ上風身ニ滲シテ。萩ハギノ下露バラ々ト。木ノ葉チリシクツノ上ニ。一群時雨ヒトムランゲフリ来ル。涙ト雨ニ死骸

(4オ)

ヲ洗ヒ。薦ゴモヤ菴ムシロヲ取モトメ。ソレニテ包ムヲ見ルヨリモ。彼子ハ又モ取スガリ。前後不覚センゴフニサケビ泣ナク。サテシモアルヘキ事ナラ子ハ。終ツイニ其所ツニ埋コメツ。印シノ石ヲ

立置タテオテ一日一夜読経シ。其ヨリ小児ヲ背セニ負ネヒ。ナク々其所ヲ立出テ。近キ里ニ出テ。鉢ハチヲ乞カフテ十町ハカリ歩ミシガ。ツラ々思ハハ浅間敷アサマシヤ。恩愛不能断オンアイフノウダン。棄恩入無キオンニラム為ト。我出家セシ其時ニ。再フタヒ妻子ニ迷マヨフマジト。仏ニ誓イヒシ言ヲ忘ワスレシ耻ハズカシサト思ヒ出シテ心ツキ。不便フイ乍モ其子ヲハ。人里ノ端ハシニテ捨置スツクテ出ユキシガ。恩愛ノ涙ナニ空モ曇クモリ。其夜ハ泣ナクアカシ。ツク々思ヒヒラメグラセハ。イカニ仏ノ御前ニテ誓イヒシ言アリトテモ。我バカリ助リテ妻子ヲ見捨ルル無道心。妻モ我ユヘ空クナリ。マタ其上ニ彼小児マデ捨置スツクシ情ナサ。

(4ウ)

タトヒ誓イヒカ破ル、トモ。カ、ル苛ムコキ事ガマタナルヘキモノカ歎ナゲカシヤ。唯此上ハ彼子ヲ連ツレ共ニ出家ノ身トナシテ。母ノ菩提トフヲ訪ウラハセント。又恩愛ノ繫繩キツナニヒカレ。已イ前ノ里ニ立戻タチモトリ。捨サシ我子ヲ尋ウツレド。更ニ傍アタリニ見ハザレハ。往来ユキキノ人ニ尋ウツレハ。イカサマ年ノ比三四歳トミヘツル小児。花袖モノキスノ絮袍フタイキタルカ。昨日ツ暮方ニ泣ナク。ク々

地藏堂ノ森ノ方へ往タリト教ヲキクヨリ。直ニソノマ、尋子至リテミレハ妻ヲ葬リシ。土ヲ堀カケ疲レシニヤ。砂ノ中へ頭ヲ入レテ死シ居タリ。コレヲミルヨリ殞ヲト恠憶果タルバカリニテ。イツソ詞モ出バコソ泣ニモナカレズ。コハイカニト。気モ心モ狂乱シ。咽ビカヘリシ血ノ涙。衣ノ袖ハ紫ニ替ルハカリノ。愁歎ハ言ニ詞モナカリケリ。詮方ナク〜妻ノ死骸ヲ

(5オ)

掘出シ。我子ノ死骸ト一ツニシテ。森ノ木枝ヤ木ノ葉ヲ集メ。夜半ノ煙トナシ果テ。二人ノ骨ヲ首ニカケ。此高野山ニ納メテソレヨリ山ヲ下ラスシテ。此所ニ庵ヲ結び。観念シテ心ヲバ。澄ント思ヘドモ。今ニ妻子ノ面影ガ。夢ウツ、ニモ目ニチラツキ。心法シヅマラス。昔妻子ノアリケル時ヨリ。却テ迷ヒフカクナリ。心モ散乱イタシヌレハ。此庵ヲ立出テ。諸国行脚ノ身トナラント。思ビ定メテ候フナリト。語レハ国春滝口モ。共ニ我身ニツマサレテ。袖ハ涙ニ湿リケル。国春入道涙ヲハラ

ビ。哀レ墓ナキ御物語キ、テダニモ悲シキニ。況ヤ其身ノ愁傷ハ。思ヒヤラレテ候ナリ。我モ同ク観法ノ心サラニ静ラス候ヘハ。諸国ノ靈仏靈場ヲ巡リテ菩提ヲイノラント。存テ候ヘハ。何ヨリ宜キ同行也

(5ウ)

ト。ソレヨリ兩僧ハ回国セント。滝口入道ニ暇乞シテ。共ニ庵ヲ立出ル。滝口入道モ見送りテ。留別ノ涙衣ニソ、ギ。命ダニアラハ又再会スヘシトハ思ヘドモ。人生何ゾ艸頭ノ露ニ如シヤ。唯永キ未来テ対面セント。互ニ見カヘリ見送りテ。サラバ〜モ速ザカル。念仏ノ声モロトモニ。余情ハ霞ニ隔タレド。涙々ニ別レ往ク。孤猿更叫秋風裏。不ニ是愁人一亦断腸。イワンヤコノ人々ヲヤ

国春熊野 逢ニ亡妻ニ并国春取ニ人柱於兵庫ニ  
○世ヲ捨テ。山ニ入ル人。山ニテモ。猶憂トキハ。何方ユクラント。兩僧ハ高野山ヲ出テ。先ニ熊野ニ参詣セント。頃ハ七月ノ初旬桐ノ一葉ニ秋ヲ知ル。目ニハサヤ

カニミヘ子(五)トモ。風ノ音ニモ往事ヲバ。思ヒ出シテ袖ヲ  
ラス。互ニ憂ウカヲカタリ合。熊野ニコソハ

(6オ)

着ニケル。本宮証誠殿ノ御前ニテ。静ニ法施ヲ奉リ。  
徹夜御山ノ躰ヲナカムレバ。心モ言モ及ハレズ。大悲  
擁護ノ霞ハ熊野山ニ霽隸リ。靈験無双ノ神明ハ。音無河  
ニ跡ヲ垂ル。一乗修行ノ岸ニハ。感応ノ月隈モナク。六  
根懺悔ノ庭ニハ。妄想ノ露モ結バズ。孰レカ憑シカ  
ラザルハナシ。夜フケ人静テ後。啓白シケルハ。抑当  
山権現ハ。本地ハコレ西方極楽浄土ノ教主阿弥陀如来ニ  
テ在マス。撰取不捨ノ御誓願ニテ浄土へ導玉ハレト一  
心ニ念仏シ。明ケケレハ。本宮ヨリ舟ニ乗新宮へ参詣  
シ。神藏ヲ伏拝ミ。明日ノ社ニ参リツ。ソレヨリ爰ヲ  
立出テ。佐野ノ松原サシ過テ。那智ノ御山ニ参詣ス。  
三重ニ漲リ落ル滝ノ水。数千丈マテ攀上リ。観音ノ靈像  
ハ。岩ノ上ニアラハレテ。補陀落山ト謂ツ

(6ウ)

へシ。霞ノ底ニハ法華読誦ノ声キコへ。靈鷲山トモ申  
ツヘシ。誠ニ帝都ヲ去ルコト四十七里。東ニハ青山高ク  
崑へ。七越ノ峯ヲ望ム。南ハ白波渺トシテタ、へ。樹  
間ヨリ眺望スレハ千帆ノ走ルアリ。松吹風ノ音ハ。凝テ  
笛ヲフクカト怪ミ。巖泉ノ落ル声ハ。咽ンテ琴ヲ奏スル  
カト疑フ。貴賤上下歩ヲ運ヒ。首ヲ傾ケ。掌ヲ合セ  
テ。渴仰稽首セザルハナシ。僧院古リテ薨ヲナラへ。道  
俗アラタニ袖ヲ聯子ケリ。国春入道。阿野ノ入道ハ。那  
智ニ一夜祈念セント。如意輪薩埵ヲ伏拝ミ。大慈大悲ノ  
尊号ヲ唱へ。念仏シテアリケルガ。孤灯ノ影モ葉露ニウ  
ツリ。皎月ノ光モ棲禽ニ映ズ。鐘磬ノ音モ寂々トシ  
テ。夜モフケワタル丑満時。国春入道トロト仮眠ケ  
ルニ。別レシ我妻モ同ク通夜シテ在シケル。国春

(7オ)

ハ大ニ驚キ。傍ニカケヨリ我妻カト取ツキ玉へハ。令室  
モ両眼ニ涙ヲウカへ。愛慕ヤ我夫別シヨリ程久シ。我ハ  
愛念ニ引サレテ。中有ノ旅ニ迷ヒシガ。君斯法師ト状ヲ

カへ。菩提ヲ訪ヒ玉ハリシ故。今ハ迷ノ雲モ晴真如ノ月ノ影清ク。今ハ証ノ身トナレリ。君ニ一礼ヲ述ン為。此所ニアラハレテ。此事ヲ告ルナリト。云フカト思ヘハ忽ニ。仏ノ姿ト現レ玉ヒ。光明赫奕トシテ西ニ飛去ルト覺ヘテ。夢ハスナハチサメニケル。国春ハツト驚テ。サテハ夢ニテアリケルカト。歎喜ノ涙ニクレケルガ。猶ソレヨリハ念誦シテ。法施ヲ奉リ。兩僧ハコレヨリ便船ヲモトメテ四国ニ渡リ靈場ヲ巡拝シ。又播磨ノ宝ノ津ニ上リケル。偕阿野ノ入道ハ西国ヘト志シ。国春入道ハ。都ノ方モユカシクテ。名残惜モ立別レ。

(7ウ)

東西岐路ヲ異ニシテ。国春ハ須磨ヤ明石ノ景色ヲナガメ。兵庫ノ浦ヲ通りシカ。折節生田ノ森ノ辺ニハ。人柱ヲ取ル忍ノ関ヲ構有ケルカ。三十人ノ人柱。二十九人ハ取ケレドモ。今一人足ザリケル故。猶往来ヲ窺フ処ニ。斯ル事トハ夢ニモシラス。コノ処ヲ通り合セ。終ニコノ人柱ノ中へ取レケルハ。無慚ト云モ愚ナリ。既ニ其年モ

クレケレハ。応保モ二年ニナリニケル

重友投宿野瀬館一併語ル国春人柱難一

○応保二年三月十八日ニハ。兵庫ノ島ヲ築ルヘシトテ。初春ヨリ其用意ヲソセラレケル。去程ニ神崎ノ近藤重友入道ハ。諸国行脚ノ僧トナリ。靈仏靈社ヲ巡礼シテ。三年ヲ経テ。丹波ノ野瀬ノ庄ニツキテ休ヒケルカ。既ニ薄暮ニ及ビケレハ。一宿ヲ投ゼン

(8オ)

ト藏人家兼カ館ニ至リ。一夜ノ宿ヲ乞ケルニゾ。元ヨリ明月姫コ、ニアルコトハ。夢ニモシラザレバ。門内ニタ、スミテ。家僕ニツキテ申シ入レケル。折節藏人ハ都ヨリ貴族ノ下向アリテ。其御供トシテ。天ノ橋立ヲ游覽ノタメ。家臣蛭名五郎。其外郎等引具シテ。同道セシ留守ノ内ナリシカハ。家老長尾新十郎ニ監家ノ役ヲ申ツケアリケルニゾ。家来ノ者。スト申入ケレハ。新十郎聞テ頓テ明月姫ニ伺ヒケレハ。諸国修行ノ出家ノ事。御宿申スモ善根ナリ。客間へ通シ供養スベシト仰セケレハ。新

十郎承リテ即時ニ内ヘソ請シケル。近藤入道大ニ喜ヒ。  
客間ニ通り勞ヲ休メテ在ケル処ニ。姫女齊ヲ供ヘ饗ケ  
ル。カクテ其夜モ初鼓ニナリ。次ノ間ニハ明月姫。襖ヲ  
隔テ、琴ヲ彈ジ。幽蘭ノ譜ト云ヘ

(8ウ)

ル曲ヲ。瓜音氣貴ク奏シ玉フ。重友入道頭ヲ傾ケ。耳ヲ  
スマシテ。聽居シガ。頓テ双眼ニ涙ヲ浮ヘ。曲コソ多キ  
ニ。彼幽蘭操ハ孔子衛ノ国ヨリ。魯ニ帰ラセ玉フ時。空  
谷ノ内ニ。蘭草ノ芳キガ。美ク生タリシヲ御覽アリ。泣  
然トシテ落涙シ玉ヒ。夫蘭ハ徳ヲ君子ニ比シ。香キヲ王  
者ニタトフ。幽貞ノ操ヲ抱キテ。尋常ノ草花ニスク  
レ。卓然タル瑞草ナレドモ。カク空谷ニ在トキハ。人  
誰カコレヲシランヤト。我道ノ行レザルヲ悲ミ。我不運  
ヲ歎キ玉フ時ニ。作ラセ玉ヒシ琴曲ナリトゾ。

案ズルニ。幽蘭譜ハ。中古我日本ニ伝テ。公卿專  
ラ奏シ玉ヒシガ室町氏ノ乱ニ亡ビテ。今ハ伝ヘズ。  
本邦ノ樂ハ。皆周漢ノ遺音ニテ。隋ノ時ニ伝ヘテ。

今ハ中華ニハ絶タリ。故ニ日本ノ

(9オ)

中古ニハ雅樂盛ニ行ハレテ。人皆コレヲ弄シ事。  
国史ニ詳ナリ。又拾茶抄。宋史ノ日本伝ナドニ。  
委クミヘタリ。今ノ世ノ琴曲ノ類ニアラズ。琴モ今  
ノ琴ニアラズ。古ノ琴ハ鯖尾琴トテ。樂ニ用ヒタ  
リ。今ノ琴ハ寛永年中。八橋檢校ト云者。樂ノ箏ヲ  
変ジテ作り。十二組ヲ作レリ。其制甚タ新ナリ。幽  
蘭譜ノ事及ヒ。古樂ノ事。共ニ秘説アレドモ今ハ贅  
セズ

嗚呼マコトヤ殷湯ハ夏台ニ囚ハレ文王ハ羑里ニ囚ハル。  
孔子モ亦宋ニ苦ミ衛ニ愁ヒ陳蔡ノ間ニ囚ハレテ。窮難ニ  
苦ミ玉ヘリ。上代ダニ斯ノ如シ。此頃人ノ噂ニ聞ケハ三  
松国春モ出家シテ。諸国ヲ修行セシカ。兵庫ノ浦ニテ人  
柱ノ中ニ囚ハレシト。武キ勇士モ斯ナリ果テ空谷ノ蘭ニ  
同シキ身ノ上トナリヌル。有為転変ノ

(9ウ)

浮世カナト類ニ感慨ノ心ヲコリ。浅間敷思ヒケレハ。覺ヘズ知ラズ声ヲ発シテ。

浮世ゾト。思ヒ捨テモ一トスジニ。人ノ上ニモ。憂コトゾキク。ト

吟シテ涙ヲハラノト流シケル。虫ノシラセカ明月姫ハ。襖ゴシニ此歌ヲ聞ヨリモ。心気悸セシカバ。琴ヲヤメテ侍女ノ駒鳥ヲ招。歌ノ意ヲ問ヒ。御僧ハ何国人ナルヤ。問ベシトアリケレハ。駒鳥客間ニ来リテ。右ノ由ヲ尋ケレハ。重友入道涙ト共ニ。事ノ縁由ヲ物語リ。我ハ津国神崎ノ邑。近藤七郎重友ト申セシ者ナルガ。発心セシ訳ハカヤフノト。明月姫ヲ恋テ。行方知レザルヨリ。飛花落葉ノ事ヲ述。其明月ノ父国春ハ。娘ノ行衛シレズ。妻ノ死セシヲ因縁トシテ。同ク発心出家セシカ。兵庫ノ島ヲ

(10オ)

築クタメ。人柱ヲトル其中ヘ。囚ハレシトキクヨリモ。余ノ不便サ浅間シサニ。今ノ歌ヲヨミツルガ。思ハズ声

ニ發セシナリト。始終ヲ語レハ明月姫。襖ゴシニ聞ヨリモ。夢ニ夢ミル心地シテ。偕ハ住吉詣ノ時。綱輿ノ内ヘ。文ヲ投シ人ナルカト。視キミレハ塩風ニ色モクロミ。尽キセヌ物思ヒニ瘦テ。ソノ人トハミヘヌ又ナレトモ。見覺ヘアル重友ナレハ。始終ヲキヒテ立タリ居タリ。乳母ノ小車ト共ニ。声ヲモタテズシメ泣ハ。腸モ断ル、ハカリ。余所ノ事ヨト思ヒシニ。父上ノ御身ノ上。母上モ御下世アリシカ。隔テ居レハ今日マテ。シラデ過セシ不孝ノ不孝。憎キ者ゾトサゾヤ嘸。艸葉ノ陰ヨリ御呵ガ思ヒヤラレテ悲ヤナ。其上ニ又父上ノ浅間シキ御身ノ次第コソ。何ニセン奚トセント。乳母ト共ニ

(10ウ)

顔見合セ。泣ヨリ外ハナカリケル。早午夜ノ鐘響ケレハ重友モ打臥ケルニ。明月姫ハ有二モアラレズ。父ノ身ノ上心ニ掛リ。乳母小車ト共ニ。其夜ノ内ニ用意ナナシ。早ノ兵庫ニ急キ行。セメテ父ノ命ニ替リ。不孝ノ託ヲナスヘシト。思案ヲ極メ。夫ノ帰ルヲ待モ事ニヨルベ

シ。一日モ早ク急ントテ。家兼イヘカママニハ一通ヲ認メ置キ。旅タビノ支度シタクヲナシケルニ。夜モステニ明ントス。東雲トシヌメニ小車メシグヲ召具シテ。踏フミモナラハヌ。山路ヤマヂヲタトリ行コソ哀ナリ。

明月姫忍テ到レ兵庫ニ并藏人訴テ官請ニ肆赦一

○既スデニ夜モ明ケレハ。重友入道モ齊トキヲ食シテ。一礼シテ出去リケル。明月姫ノ御曲房ヲツボ子ヲ開テ。朝アサノ伺ウカヒニ参ラント。侍女ドモ至リ見ルニ。姫君モ小車モ在ワサズコワ何クニト尋ルニ。御手筈バゴノ上ニ

(11オ)

書置一封アリ。偕サテハト各々サワギケテ搶擲サワギケテ出シ。此由早ク注進セントテ。大臣長尾新十郎ハ取物モトリアヘス。野瀬ノ藏人ノ旅館リヨクワンニ至リ。シカ々ト告ケレハ。家兼ハ大ニ驚キ貴族キソウヘモ右ノ旨ムチヲ申上。天ノ橋立ヨリ馬ヲ早メテ馳カヘリ。姫カ残セシ書ヲキヲ。取間運シト押ヒラキ。読下セハ。今生ナラサル花ノ縁。カク散カワルベシトハ。ユメ々思ヒヨラザリシニ。父母フシマキ々ノ御事ヲ。風カゼノ便ツヨクニ

キ、ヌレハ。身ツミトカノ罪咎ヲモ恨メシヤ。痛ハシヤ母上ハ。我ヲ案ジテ空クナラセ玉ヒ。又父国春ハ通世トシセイシテ。諸国修行ニ出玉ヒ。兵庫ノ浦ニテ人柱トヤランニ囚ハレ玉ヒ。今日トモ明日トモ御最期サイゴヲ。定メヌ由ヲ承ル。情ケノ縁ガ尽バコソ。御身ミミノ恨モオワセンメ。唯片時ウラナヒモ早ク急キ。父ノ命ニカワリタク。斯カクシノビ

(11ウ)

出候ナリ。我モナカラン其跡ソノアトニ。何ナル花ニ藝玉ナレフトモ。思召オホシメシ忘レズハ。菩提トツラヲ訪ヒタビタマヘ。返ス々ト。止メタリシ水荃ミヅクキヲ見ルヨリモ。藏人ハ忙然バカゼントシテ。我レ過テリ々。斯カクナリユキシモ皆我咎ミタガ。客氣ウハキノ色ニ迷フマ。人ノ娘ヲ奪ムハイマヒ取。彼父母ニ苦勞ヲカケ。母ノ死去アリシモ。国春ノ囚ハレシモ。思ヘハ々皆我業ワサ。此託コトワヒニハ家兼ガ。国春ノ身ニカハリ。人柱ニ立ツヘシト。涙ト共ニ用意ヲナシ。者共馬ヲヒケ。支度セヨ。五郎来レト乗出シ。早馬ニテ驅出レハ。蜷名ヰナ五郎モ付ンヒテ。急ニイソギテ追付キケルニ。家来ドモ、追々

二。主人ノ跡ヲ尋子(五)。兵庫ヲサシテ急キケル。痛ハシヤ  
 明月姫ハ。乳母メノト小車召ツレ玉ヒ。マダ踏モミヌ旅クレイマノ  
 空ソラ。心細道タドリユキ。三岬山ニツ着ニケリ。此山ハ樵父キコロ  
 ノ通フ路多ミチオホク

(12オ)

彼方アナタ此方トフミ迷マヨヒ。ヤフ〜木蔭コカゲニ一夜ヲアカシ。樵父キコロ  
 二道ヲ習ヒツ、。知ラス山路ヲフミワケテ。末スヘノ松山恋  
 ノ森。心計バカリハ急ゲトモ。女ノ足ノ果ハカドラズ。夜ヲアカシ  
 日ヲクラシ。兵庫ノ浦ニゾ着ツキニケル。偕人柱サテノ事ヲ人ニ  
 尋レドモ。清盛公ヨリ堅カタク沙汰スベカラストノ御触ツツシアリ  
 ケレハ。上ヲ恐レテ有ノ儘マ二語ル人ナシ。明月姫ハ心ヲ  
 悩ナヤシ疲ツカレ果タル折柄フリカニ。野瀬藏人家兼ハ。早馬ニテ駆来  
 リ。明月姫ニメグリ逢アヒ様子イカニト尋レハ。姫ハ涙ナ  
 カラニ右ノ次第ヲ物語レバ。マツ〜旅館リヨクワンヲカマユヘ  
 シトテ。宿ヲ取テ亭主テイシユヲヨヒ。築島ノ奉行ハ誰ニテ渡ラ  
 セ玉フゾト尋子(五)ケレハ。奉行ハ阿波アハ民部重能ニテ。諸  
 司ハ五条大納言国綱卿ニテ渡ラセ候フト答ヘケル。家兼

キ、テ。ヨシ〜国綱卿

(12ウ)

二ハ。我内縁ヲ持テアレハ。参テ願ヒヲ申スヘシト。国  
 綱卿ノ御館ニ参リ調シテ訴詔エツシケルハ。三松国春入  
 道。此度人柱ノ中ナカハレ候由。甚ハナハタ以テ歎カシク存  
 ジ。其娘明月姫父ノ命ニ替ラント申候ヘドモ。何卒ナニトツア重相  
 公ノ御慈悲ヲ以テ。我ヲ囚トラヘテ沈シツメ玉ヒ。国春ヲ助命ジヨメイナ  
 シ下サレナハ。忝カタジケナクク存スルナリト。思ヒ入テゾ願  
 ヒケル。大納言国綱卿聞召尤ノ願ヒナリ。去ナガラ。  
 私ノ事ナラハ。国綱イカニモ計ラヒ申スヘキナレドモ。  
 此度ノ築島ハ入道殿ノ願望ユヘニ造作ザウサアルコトナレ  
 ハ。私ノ計ハ思モヨラス明後十八日ニハ。必ス島ヲ築カ  
 ルヘキノ評定ナリ。併シカシナカラゴヘン足下内裏ヘ参テ願ヒ申サレナ  
 ハ。国綱モ心ノ及ビ申スタケハ取成申ヘシ一門ノ御評議  
 ノ時ニ我其事ヲ申出スヘキアヒダ。足下モ明

(13オ)

日早天ヨリ。我知ラセニ随テ。御座席ヲ同ハレヨト。慇<sup>ゴロ</sup>懃ニ申サレケレハ。藏人礼謝シテ旅館ニカヘリ。明月姫ニ此由ヲ物語リ。若我願ヒ叶ハスンハ。庭上ニテ切腹シ。未来ニテ待申サン。国春殿モ其方モ跡ヨリ来リ玉フヘシト。其夜ニ出仕ノ用意ヲナシ。明ルヲ遅シト待居ケル

兵庫築島伝卷三終

(13ウ)

### 【卷三解題】

卷二から続く滝口入道の語りから始まるのが卷三である。

前半部分は、国春が高野山で出会った滝口入道と阿野入道の語りを中心をなしている。この滝口入道の語りとその後に配される阿野入道の語りは、幸若舞や説経淨瑠璃には見られないという特色を有している。興味深いのは国春の動きであり、卷一・二と指摘してきた『平家物語』

語』との関わりが、部分的にはあるものの指摘可能である。卷二の記述を含めて、国春が高野山にて滝口入道の手によって剃髪し、そして高野山から熊野に行き、佐野の松原を通って那智へと至るという点に注視すると、『平家物語』における維盛の姿と重なるものがあるといえるのである。高野山に登って以降、国春の動きを中心に見ると、『平家物語』卷十「横笛」から同「高野の巻」「維盛出家」「熊野参詣」に涉って、表現においても関係性を指摘することが出来ることから、『平家物語』を下地としている可能性が強いといえる。

卷二から続いた築島から離れた展開も、国春が人柱を取るための関が設けられている兵庫の浦を通ることで、卷一の最後に繋がることになる。以降、卷三の個々の場面は、幸若舞『築島』に類似箇所を見出すことが出来る。しかし話の構成においては注意を払う必要があるといえる。この問題については先号においても触れたが、『築島伝』において、重友を介して国春捕縛を明月姫が知る場面は、幸若舞『築島』においては重友が唯一登場

する場面となっており、『築島伝』では巻二において描かれた重友発心の理由とともに描かれている。また石見掾正本『ひやうごのつき嶋』は、重友を最初に登場させており、国春捕縛以前にも登場するという点においては同様であるといえるものの、明月姫を家兼が連れ去ることで重友と家兼が刃を交えるという『築島伝』には描かれていない場面が存するといった相違点が存在している。古浄瑠璃『兵庫つきしま付タリ清盛島こんりう』においても、明月姫を家兼が連れ去ることで重友と国春が争うという『築島伝』には見られない展開を見せており、『築島伝』との話の構成における一致は同じく見られない。つまり『築島伝』巻三後半部分は、部分的には類似性が窺えるも、そこにいたるまでの話の組み立てといった点においては、先行する他の築島伝承を素材とした作品との間に、差異が認められるのである。

〔付記〕

先々号の巻一の翻刻において、「粵」(11才)とあるが、「卿」の誤りである。ここに記し、訂正させていただく次第である。

(もりた まさや・関西学院大学文学部教授)

(たかせ まひと・関西学院大学大学院  
文学研究科博士課程後期課程)